ISSN 0285-9629

LUTÈCE 22

——フランス語フランス文学研究——

目　次

《無冠詞》用法の研究——《動的認識構造》に依る
文法的現象の統一的解釈（Ⅱ）——……福　島　祥　行（1）
リシュネルの「反復」の概念再考——武勲詩の特異な技法について——
……小　栗　栖　等（20）
パスカルにおける説明の簡略
……足　立　杉　子（38）
『裏と表』における空間描写について——カミュの空間意識を求めて——
……姫　野　憲　二（47）
文学社会学の学問上の地位、理論体系、研究方法について
……于　　沛（67）

大坪一先生を悼む　……加　藤　美　雄（85）

彙報（88）／研究会の記録（90）／大阪市立大学フランス文学会会則（91）／編集後記

1　9　9　2

大阪市立大学フランス文学会

編集後記

当初は、９月中に発行を予定していたにも関わらず、秋も過ぎ、冬が巡り来たって、ようやくリュテス22号をお手元にお届けできることとなりました。編集委員として不手際を反省すると同時に、早くから原稿をお寄せくださっていた方々には、長い間お待たせし、ご迷惑をおかけしましたことを深くお詫びする次第です。

なお、今号には、本年一月に逝去なされた大坪一氏を悼み、加藤美雄氏にお願いして、思い出などを綴っていただきました。当時の大阪市大仏文学科の雰囲気を偲びつつ、先生のご冥福を謹んでお祈りしたいと思います。

Lutèce 第22号

1992 年 12 月 31 日 発行

編集発行者 大阪市立大学フランス文学会
大阪市住吉区杉本 3－3－138
代 表 者 小 西 嘉 幸
印 刷 所 アルプス印刷

リシュネルの「反復」の概念再考

── 武勲詩の特異な技法について ──

小　栗　栖　等

Ⅰ．序── 本論の目的と射程

ジャン・リシュネルの『武勲詩── ジョングルールの叙事詩技巧についての試論』[1]は、現在に至っても、多くの武勲詩研究者に基本文献としてその名を挙げられており、フォルミュール、数構造などの研究者に── たとえ、そうした研究の創始者がリシュネルでないにせよ── 出発点を与えもしている。つまり、彼の『武勲詩』の隅から隅迄が、いずれかの研究者に引用あるいは援用されているのであり[2]、リシュネルの「記述的」研究が[3]、武勲詩という対象を形式面から捉えるだけに留まらず、その考察そのものに形式的な方法論を導入するものであったことが、その理由として挙げられよう。しかしこうした状況にあって、『武勲詩』の「反復<reprise>」に関する考察は十分な理解を得られず、展開を施されないままに今日に至っているように思われる。その原因は、リシュネルが「反復」そのものを形式的に扱わなかったことにある。

そこで本論は、リシュネルの着想と考察に基づきつつ、その「反復」の概念を形式的な方法論で捉え直し、その表現形式の特性の一端を明らかにすることを目的とする。そしてその過程においては、リシュネルが「反復」そのものを扱わなかった理由及びその功罪も明らかになろう。

ところで本論は、一般に言葉による表現形式が、歴史的、地理的条件がもたらす時間、空間把握の形式と緊密に結び付いており、武勲詩の技法もまた、ヨーロッパの古典古代世界とも、近代世界とも異なった中世の時間、空間の把握の形式と緊密に結び付いているという仮説を証明するための予備考察として、まず、武勲詩の「反復」の技法の特性を記述することを目指したものに外ならない。

II．諸詩節の関係と「反復」の概念

武勲詩には行数不動のレースという詩節形式が用いられているが、リシュネルは、複数のレースの間の関係のあり方として、五つの類型を挙げている。

a)連鎖反復<enchaînement>：「先行するレースの末尾部分で既に言われたことを後続のレースの冒頭部で、多かれ少なかれ類似した形で反復する<reprendre>」

b)分岐反復<reprise bifurquée>：「二つの瞬間がここでは並置<juxtaposés>されている。あるいはもっと厳密に言えば、同じ一つの瞬間に始まって、二つの異なった流れが展開しているように思われる……しかし、前レースから後レースへの冒頭への移行は、跛行的な断絶法<solution>であり、物語の流れに従ってレース同士を連鎖させるのでなければ、相並ばせて、完全に並行に配置するわけでもない……」

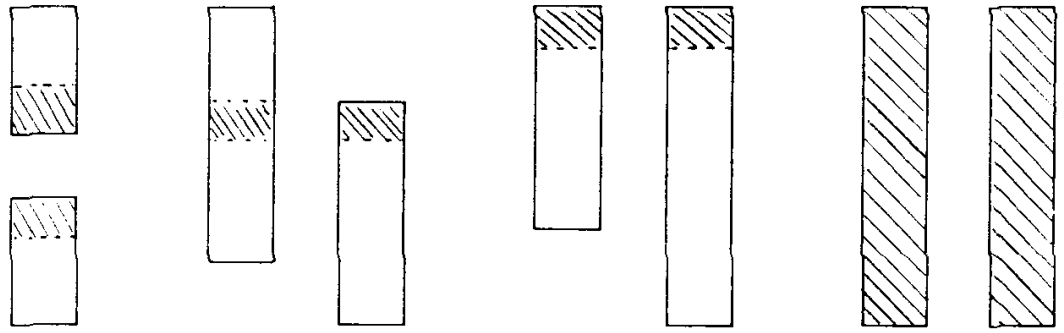
c)相似冒頭<débuts similaires>：「前レースの歌い出しの部分で既に現れたテーマ<thème>の反復<reprise>で、後続のレースを歌い出す……しかしながら、レースの並行関係はまだ完全なものではない、というのも後続レースは、前レースの冒頭と相似の反復<reprise>のあと、物語を前レースより更に未来へと導いているからである」

d)並行詩節<laisses parallèles>：「レースが、完全に並行であるためには、そのレースが関わる『物語』の切片(tranche de *récit*)自身もまた、無論同一ではないにせよ、並置可能<juxtaposables>でなければならない……この技法は物語の類似し並行した瞬間を切り分ける」

e)相似詩節<laisses similaires>：「異論なく、『ロラン』の作者こそが、相似詩節のアンサンブルが持つ抒情詩的な効果を最大限に利用している。彼の用いる三つのレースからなる相似詩節は、最も劇的で、最も決定的な諸瞬間に物語の歩

みを止め、ある種の堰、即ち抒情詩的な鮮やかな休止状態を形成する。そのあとで、叙述は再び流れを取り戻す」[4)]

直観的に理解を得られるように、これを図式化してみると以下のようになる。但し、それぞれの、長方形はレースを表しており、網の入った部分は反復部分を表している。無論、レースは行数不同である以上、長方形全体、あるいは、網の入った部分の長さは、実際の詩行数と如何なる対応関係も有してはいない。



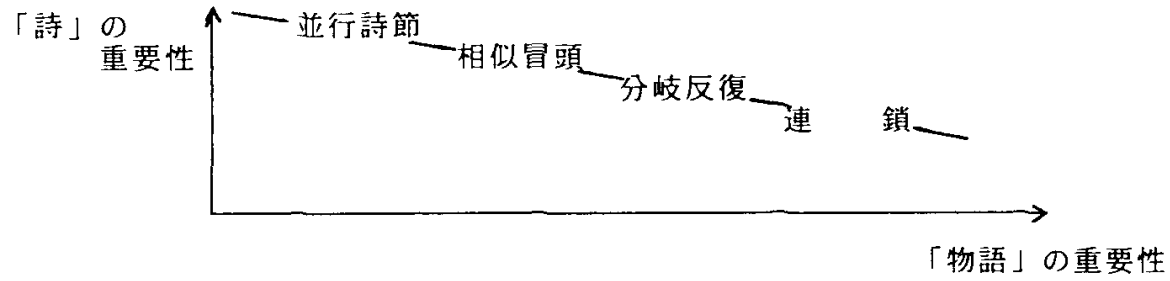
【連鎖】　【分岐反復】　【相似冒頭】　【並行詩節】
【相似詩節】

上の、図式を一瞥して明らかであるのは、リシュネルが何らかの反復を基準にして、レースの諸関係を分類していることである。彼は、上のレースの諸関係の分類に関して、以下のように言う。

「物語の流れ<ligne> に基づいた複数のレースの連鎖から出発し、複数のレースの間に『ずれを齎す』中間的な断絶法を通り抜けて、複数のレースを併置する並行法<parallélisme>に至ることとなった」[5)]

つまりリシュネルによれば、上の図式に見られるように、物語内の事件の継起という意味での物語の流れ、即ち「叙述的進行」を垂直方向に考えた場合、連鎖は垂直的に、相似冒頭及び、分岐反復は斜めに、並行法は水平的に複数のレース

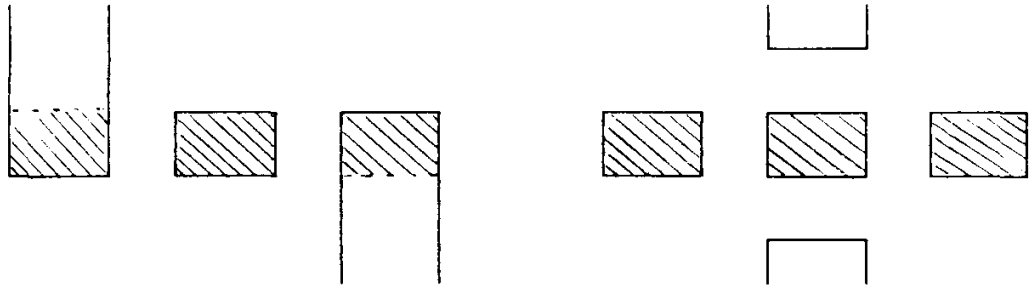
を結び付けるのであり[6]、後に来るもの程、「叙述的進行」からの逸脱が大きくなる。一方、「『物語』の切片」の重なり具合に注目してみると、連鎖、分岐反復、そして相似冒頭においては、反復部分がレースの一部しか占めないのに対して、並行詩節の場合、詩節の全体を反復が占める。それ故、並行詩節の場合、レースが「物語」の分節に対して大きな影響を与え、「叙述的進行」からの逸脱が大きいという意味で、詩的形式、つまりは、「詩 <chant>」のレヴェルの重要性が大きいことになる。一方、反復部分の最も少ない連鎖は、それだけレースの影響力が少ない一方で、「叙述的進行」からの逸脱が極めて軽微であるということができ、叙述、即ち「物語<récit>」のレヴェルの重要性が大きくなる。そして、相似冒頭の場合、少なくともレースの冒頭部に関して、分岐反復よりもレースが重要性を持つ点で、また、分岐反復では連鎖より反復部分が大きい点で、「歌」のレヴェルが相対的に大きな重要性を持つことになる。そこで、この観点から見た場合、連鎖、分岐反復、相似冒頭、並行詩節の関係は以下のようになる。



一方、相似詩節は謂わば究極の並行詩節として捉えられるべきものである。リシュネルは一旦相似詩節に二つの種類を認める。その一つは、『ロランの歌』に見られる完全に「物語の歩みを止め」る、即ちそれぞれのレースの語る『物語』の切片に極めて大きな類似を見せるような相似詩節である。もう一つは、『ラウル・ド・カンブレ』に見られる、反復部分が完全に諸レースを支配し切っておらず、また、レース全体が水平に並ばないような、つまり「叙述的進行と完全に手を切っていない」ような相似詩節である。

リシュネルは、前者を「相似詩節を伴った並行詩節 <laisses parallèle aux

laisses similaires>」と呼んで、これを真の意味での相似詩節とし、後者には「結節<nœud>」の名を与えて、連鎖の一種であるとする[7]。



Raoul de Cambrai　　*Chanson de Roland*

結局の所、リシュネルのレースの諸関係の分類は、「相似詩節を伴った並行詩節」をクローズ・アップするものである。彼にとって、『ロランの歌』に殆ど固有とも言えるこの詩節形式は、他の武勲詩にも見られる、連鎖、相似冒頭、分岐反復、そして並行詩節の頂点に立つものである。逆から言えば、殆ど反復部分を含まない連鎖、そして詩節形式の重要性が比較的軽微であるような分岐反復などを多用することで、「詩」のレヴェルよりも「物語」のレヴェルを重視する「叙述的な」武勲詩諸作品に対して、反復に関わると関わらざるとに拘らず、常にレース形式と「物語」の分節を一致させ、「物語の歩みを止めさせ」る相似詩節を効果的に用いる、つまりは「詩」のレヴェルに大きな重要性を与える、「抒情詩的な」武勲詩作品たる『ロランの歌』を特権化し、「非典型的な」武勲詩作品とすることにこそ、リシュネルの目的はあった[8]。それ故、レース形式を反復に従って分類する必要があったのである。何故なら、以下に見るように、反復そのものをその性質に従って分類する場合、必ずしも『ロランの歌』は特権化されえないからである。

Ⅲ. 反復法<répétition>と「反復<reprise>」

リシュネルの扱った反復の特質を問い直そうとする場合重要であるのは、その

反復に少なくとも二つの種類があるということである。並行詩節と相似詩節の違いは反復の種類の違いに帰着する。というのも、並行詩節の用いる反復が「物語の類似し並行した瞬間」を対象とするのに対し、相似詩節の反復は「物語の歩みを止め……抒情詩的な鮮やかな休止状態を形成する」。つまり前者においては、物語の前進が決して妨げられないのに対し、後者においては、物語の進行が一つの円環をなしてしまうからである。

並行詩節タイプの反復の本質は、「類似の瞬間」を語る点にあるのではなく、謂わば同一の表現のつまりはシニフィアンの繰り返しという点にある。つまり、これは古典的な修辞学でいうところの反復法<répétition>に対応することがわかる[9]。そこで、並行法タイプの反復を、そのまま「反復法」と呼び、相似詩節タイプの反復に、リシュネルの用いていた「反復<reprise>」の名称を与えるのが適当であろう[10]。

ところで、「反復法<répétition>」が、既に、修辞学の「数世紀もの間の分類熱」[11]に晒されてきた、謂わば近代の文学にとっても馴染みの文彩であるのに対し、「反復<repirise>」は、少なくとも修辞学の網の目を逃れた、一つの独特な技法であった可能性がある。そうである以上、本論が以降主たる問題とするのは「反復<répétition>」の方であるが、その前に、他の反復が如何なる性質を持つものであるのかを検討しなくてはならない。

Ⅳ. 分岐反復と相似冒頭

既に述べた様に、リシュネルは連鎖、分岐反復、相似冒頭を経て、並行詩節に至り、並行詩節の特異形態として相似詩節を見るが、それは飽くまで、レース形式を分類する際の便宜によるものである。例えば、リシュネルが一旦相似詩節の例として挙げた『ラウル・ド・カンブレ』の「結節」は、『ロランの歌』が「非典型的」であることを示す為、連鎖の一種とされる。右の事実は、実のところ、相似詩節と連鎖が同じタイプの反復、つまり上に定義した「反復 <reprise>」に関わるものであることを示している。一方、相似冒頭が同時点を各々レース冒頭部に配置するような分岐反復である以上、相似冒頭と分岐反復も同じ性質の反復

に関わることは確かである。

そこで我々は、「反復 〈reprise〉」の特質に目をやる前に、先ず、この分岐反復タイプの反復が、如何なる性質を持つのかを検討する必要がある。

リシュネル自身はどのように考えていたのであろうか。例えば『ルイの戴冠』では、血気に逸る敵を眼前にして、恐れをなしたギョームの祈りを捧げる場面が分岐反復の形式で語られる。僅か五行で終わる第一の祈りは「聖マリア様」で始まり、九十五行にも及ぶ第二の祈りは「栄えある神様」で始まり、それぞれ全く異なった内容を展開する。これに関して、リシュネルは以下のように言う。

「この二つの異なった祈りは同一の時点から始まっているが故に、ギョームはどちらの祈りを先に口にしたのかと自問してみたい誘惑に駆られもするであろう。しかしその問いは如何なる意味も持ちはしないであろう。物語 〈récit〉のレベルで問われたその問いは、詩〈chant〉 のレベルでしかその返答を見出せないだろうからである。重要であるのは反復〈reprise〉 であり、《分岐反復》という『形式 〈forme〉』であって、事件の継起ではない。

しかしながら、この形式は叙述 〈narration〉にも影響を及ぼす。というのもクロノロジックな進行を撹乱して、この形式は、同一の現在から二つの未来を派生させるからである」[12)]

リシュネルの「詩のレベル」と「物語のレベル」の対立は極めて曖昧であり、「詩」という言葉がほぼ詩節形式、つまりレースの意味あいでのみ用いられることもあれば、「物語」という語が殊の外広範に叙述の形式迄を含むこともある。しかしここでは、「詩」と「物語」の対立は「形式」と「内容」の対立に相当するであろう。つまり、上の二レースはギョームが二回祈りを捧げたことを意味するのではなくて、それは一回の祈りを分岐反復という形式で表現したものに過ぎないということである。また、ここでの「叙述」という語は、物語内の事件の継起、即ち「叙述的進行」の意と、語る行為の二つの面から理解されるべきであろう。というのも、二つの未来は、当然、それが派生する前の「同一の時点」と同

様に、同じ時間、少なくとも同じ順序関係に、生起するものの筈であるが、語る行為はこれを継起的に語らざるを得ないのであり、その結果、「叙述的進行」そのものに混乱を来すことになるからである。そして、それこそが「クロノロジックな進行」に対する撹乱の意味するところである。そこで、分岐反復の特質は、同一の事件の継起の、同一の時点（あるいは前後関係）に、二つの相異なった事件を組み込み、それを語る行為のレヴェルでは継起的に配置する点にある。

Ｖ．分岐反復の系列と相似反復の系列

既に述べたように、連鎖も、相似詩節と同様に「反復」に関わっている。連鎖の本質は、「先行するレースの末尾部分で既に言われたことを後続のレースの冒頭部で、多かれ少なかれ類似した形で反復する<reprendre>」点、つまりは同一の事件を二度語るという点にある。この同一の事件を語る「反復」部分が肥大し、連鎖を行う前後のレースの間に、独立した「反復」部分のみからなるレースが生じた場合、これは「結節」となる。更に前後のレースまでもが、「反復」部分にのみから構成されるようになった時、それは「相似詩節」ということになる。つまり、「反復」の本質は、同一の事件を多面的に語る点にあるが、その際には、分岐反復と同じ困難が生じることになる。同一の事件、つまりは同一の時点を語る諸切片が、語る行為のレヴェルでは、やはり継起的に配置されざるを得ないのである。また、分岐反復や相似冒頭が、同一の時点を表す際には、相似詩節系列と同種の反復が行われることも注目に値する。

畢竟、「反復」の本質を、同一の時点を、継起的に複数の物語の切片で語り、その結果、「クロノロジックな進行」を乱す点にあるとし、分岐反復と相似反復を共に「反復」の系列に加えることが妥当だと言える。

そこで、我々は反復を以下のように分類することができる。

「反復法<répétition>」――並行詩節

「反復 <reprise>」――相似詩節：結節：連鎖
　　└――分岐反復：相似冒頭

但し、分岐反復の系列と、相似反復の系列を隔てるのは、前者が、二つの異なった事件を述べていると考えざるを得ない程の差異を詩節間に齎すのに対し、前者が、同一の事件を異なったやり方で述べていると思える範囲内に、詩節間の差異を抑える点にあるが、その境界を厳密に確定することは恐らく不可能である。例えば、先に挙げたギョームの祈りなども、同一のギョームの祈りを別なやり方で語ったのか、全く異なったギョームの事件を同一の時点の出来事として語ったものであるのかを決定付けることは恐らく不可能であろう。

ところで、「反復」には多くの場合、並行詩節と同様の表現のレベルの反復を含んでいる。そこでこれを記号化して見るならば、以下のようになる。

a)連鎖　　：／ａ－ｂ／ｂ'ᵇ－ｃ／
b)分岐反復：／ａ－ｂ－ｃ／ｂ'ᵇ－ｄᶜ －ｅ
c)相似冒頭：／ａ－ｂ／ａ'ᵃ－ｄᵈ －ｅ／
d)相似詩節：／ａ－ｂ／ａ'ᵃ－ｂ'ᵇ／
e)並行詩節：／ａ－ｂ／ａ' －ｂ' ／

／は、詩節の切れ目を、全角のアルファベはシニフィアンの諸部分を表している。それ故、ａとａ' で示されるのは、表現上の反復である。一方、¼角のアルファベは、前レースと後レースの物語内での同時性を表している。分岐反復や相似冒頭の全角と¼角のアルファベが一致していないのは、「同じ一つの瞬間に始まって、二つの異なった流れが展開している」からである。

こうして見ると、リシュネルがシニフィアンのレヴェルでの類似を反復の指標として反復部分の詩節内での増減・位置関係を測り、それを基準に相似詩節と分岐反復の間等の区別をおいたことがわかる。彼が相似詩節と分岐反復を区別する際に、問題にするのは、「二つの未来」かどうかではなく、端的に、前レースと後レースが完全な並行をなしていない、つまり、ａとｅの要素に相当する部分がないからである。その点で、リシュネルの分類法は詩節形式こそを問題にしていたのであって、反復そのものの分類を問題にはしていなかったのである[13)]

さて「反復」の分類に関する限り、リシュネルの用いた基準が不十分であることは事実である。というのも、シニフィアンが如何なる類似性を持たなくとも、同一の時点を対象とする複数のシニフィアンである限り、そこには「反復」があるとみなされるべきだからである。事実さもなければ、例えば分岐反復の反復部分は、二つの未来の生じる以前までということになってしまうであろう。それ故「反復」の本質はやはり、「クロノロジックな進行」を乱す点にあると言える。

Ⅵ．「反復」と「反復法」の特質――言語学の視点から

既に、「反復法」の定義に関しては、シニフィアンの語を用いてきたが、ここで更に言語学の用語、あるいは言語学的な比喩を用いることにしたい。「反復」がある独特の（それが中世文学にであるのか、武勲詩にであるのか、或いはリシュネルの扱った初期の武勲詩にであるのかは、今後の考察の課題となろう）表現形式である可能性がある以上、様々の表現形式を扱う――「語り方」を問題とする「物語論」に倣って、用語法を整えることは有用だと思われるからである。

さて、「反復法」をシニフィアンのレヴェルでの繰り返しであると定義しながら、「反復」をシニフィエのレヴェルでの繰り返しであるとしなかったのは、こうした定義をした場合に、言語学のシニフィアン－シニフィエの対立との、有益な相同性を全く損ってしまう恐れがあったことと、「反復」の二つの系列の差異がこうした定義を受け入れなかったことによる。例えば、「反復法」が同一のシニフィアンを相異なったシニフィエに与えると定義した場合、「反復法」の本質を正しく捉える為には、シニフィエは、物語の中で語られた同一の事件の意味で用いられなくてはならない。さもなければ、同一の事件を語る場合に、同一のシニフィアンを様々の意味で用いることとの区別が付かなくなる。しかし、周知のとおり、シニフィエは語られたものそのものを指すのではなく、概念を表すものである。しかも、シニフィエを物語内の事件と見做した上で、「反復」をシニフィエの繰り返しとした場合、分岐反復系列の「二つの未来」を処理しきれなくな

ってしまうばかりではなく、「反復」と登場人物が物語の中で同一の行為を繰り返すこととの区別さえ付かなくなる。

この二つの問題は、結局のところ、一つの原因に端を発している。端的に、用語＝項が一つ足りないのである。そこで、言語学の用法からは幾分逸脱してしまうかも知れないが、もう一つの項＝用語としてレフェランという語を導入する必要がある。レフェランのレヴェルは、物語の内部のレヴェルである。つまり、レフェランのレヴェルでの反復は、登場人物がある行為を「実際に」繰り返しことを意味する。それに対し、シニフィエのレヴェルの反復は概念の繰り返し、つまりは、ある一つの事件に纏わる多様な意味である。無論、それと同時に、シニフィアンの意味するものでもある。

上の用語を用いるならば、「反復法」は、同一あるいは類似のシニフィアンの複数のレフェランに対する繰り返しであり、「反復」は同一あるいは類似のシニフィエの同一のレフェランに対する繰り返しである。つまり、同じ意味で用いられているシニフィアンであっても、異なったレフェランに対して用いられている以上、「反復法」の本質にシニフィエの類似（相違）の度合いは関わらない。一方、異なったシニフィアンであっても、同じことを言っている以上は、「反復」にはシニフィアンの相違（類似）の度合いは関わらない。

上の定義では、分岐反復系列の「反復」が捉えられていないように見えるかも知れない。しかし、それは必ずしも正当ではない。シニフィエは飽くまで概念であって、それがそのまま、登場人物の行為そのものと捉えられる訳には行かないのである。例えば、ギョームの異なった祈りは、ギョームの祈りを逐語的に言い表したものではなくて、「ギョームの祈り」という概念を表したものであり、両者が如何に異なっているとは言え、それが敵を見て恐れをなしたギョームが超越者へ加護を求める言葉であることに違いはなく、その点で、同一とまでは言えないまでも、同じ意味なのである[14]。

Ⅶ．クロノロジックな進行の乱れ

しかし一方で、上のような同一性へ回収できない「二つの未来」もあり得る。

『ロランの歌』の以下のような分岐詩節が見られる。シャルルマーニュはエックスに帰還して、ガヌロンを裁く陪審の召集した、続く詩節でもシャルルはエックスに帰還して、ロランの許婚者オードに出会う。これもまた、物語の展開上期待される、シャルルがエックス帰還と同時に行うべきことという意味で、ある種の同一性を認められないこともないであろう。しかし、それよりも、既にギョームの分岐反復の例でも見られた、「クロノロジックな進行」の乱れの極限例と見做したほうが素直であろう。

「クロノロジックな進行」の乱れは、同時点を語るあらゆる「反復」が、シニフィアンの線状性の故に、継起的にしか語られ得ないところに起こる。しかし、そうした乱れは、結局の所、我々にとってそうであるに過ぎないのではないであろうか。シニフィアンの線状性に関して、ソシュールは以下のように言う。

「言語においては、シニフィアンが聴覚的性質をもっているため、時間の中でのみ展開し、時間から借用した次の性格を有する。つまり、(a) 一方向の広がりを表すこと、(b) 唯一の次元においてしか形作られない広がりを残すこと、である」[15)]

つまりシニフィアンは、物理的時間の流れに従属する音声の連鎖である場合、時間の矢と同一視され得るような、不可逆的な方向性を持った線としてある。上の原理を物語言説に適用する際、「聴覚的性質」という言葉を障害と見做す必要はない。というのも、「テクストに反している」という意味での「違反の意識」なしにはテクストの逆読みをすることはできないからであり、それ故、確かに聴覚映像としてのシニフィアンの線状性から見れば、相対的にその拘束力は弱いとはいえ（なぜなら、それは我々の違反の意識に訴える拘束力だからである）、ディスクールのレヴェルにおいても、シニフィアンの線状性を見出すことはできるわけである。

「反復」とは既に述べた様に、同一あるいは類似のシニフィエの同一のレフェ

ランに対する繰り返しであるが、その結果、シニフィエに連座するシニフィアンの継起がレフェランの継起と同一視される。そこに「クロノロジックな進行」の乱れが見出されるわけである。このことは、逆から言えば、我々自身が、シニフィアンの線状性という不可逆性を、レフェランの継起の不可逆性と同一視していることを意味している。つまり、我々は物語のテクストを前から後ろへと読み進む時、そこに語られる事件の継起を、物語内の事件の継起と見做してしまうのである。しかし、シニフィアンの不可逆性は、語るということにある時間が必要だということから来るものに過ぎず、レフェランの継起の不可逆性と必然的に同一視されるものでは決してないのであって、そこに我々の形式と、中世ヨーロッパの形式の差異が見出され得るのである。しかし、この点は、更に十分な検討を要することも最後に確認しておかねばならないであろう[16]。

【註】

1) 拙論「武勲詩に関する諸研究―― その(1) Jean Rychner: 『武勲詩』」（TLLMF n°3、大阪市立大学森本ゼミ発行）を参照。尚、本論で言及される文献に関しては、全て参考文献一覧を参照されたい。
2) 比較的、新しい例としては、R. Pensom, E. W. Bulatkin, G. Ashby-Beach, M. Hecht らの名を挙げることができよう。
3) Cf. Rychner, p.7
4) Cit. Rychner, a) p.74, b) pp.80-81, c) pp.82-83, d) p.83, p.89
e) p.93
5) Cit. ibid., p.86
6) Cf. ibid., p.82
7) Cf. ibid., pp. 102-104
8) リシュネルは結論部分で『ロランの歌』を「意識的に創出された作品」と見做すことができるとしている。ところで今や、『ロランの歌』を唯一の「国民的叙事詩」とする見方が、ナショナリスムというイデオロギーの生み出した神話に過ぎないのではないかという疑念が、ロベール・ラフォンやハンス・ロベルト・ヤウスらによって表明されているが、リシュネルのこの言葉を単にそうした神話に基づいたものと見做すのは不当であろう。というのも、リシュネルが『ロランの歌』を特権化しようとしたのは、上の言葉から更に、武勲詩の起源を探る際に、『ロランの歌』を武勲詩の典型例とするわけには行かないのだという結論を引きだす為だったからである。それ故リシュネルは、武勲詩の代表とされた『ロランの歌』が武勲詩の一つの作品に過ぎず、その起源を探ることが武勲詩全般の起源を探ることと同一視されるべきでないと主張した点で、寧ろ『ロランの歌』にまつわる一つの神話をはぎ取ったとさえ言えるのである。
Cf. Rychner, p.154-158
9) フォンタニエは反復法<répétition>を以下のように行っている。

「反復法の本質は、幾度も同じ語、同じ言い回しを用いて、文章を飾ったり、情感のより力強く、精彩に満ちた表現を得るところにある」（原文は全てイタリック、強調は引用者による）ここで注意しなくてはならないのは、上の反復法が「並行詩節」の反復法と完全に同じものというわけではないことである。前者の場合、反復される単位は、一語かせいぜい数語、であるのに対し、「並行詩節」は文以上の単位で反復を行っており、それに伴い、反復の単位間に完全な同一性は損なわれるのである。そうした要因の一つには、リシュネルによれば、アソナンスの変更がある。

10) <répétition>の動詞形態である<répéter> が、語学教師などにより、「そのまま繰り返しなさい」の意味で用いられること。一方、<reprise> の動詞形態である<reprendre> が「再び取りあげる一手直しする」という意味で用いられること。以上の、二点を考慮すれば、用語の対立の適切さを認めることができよう。こうした対立のあり方は、全くのところ、問題となっている二種の反復の対立に対応するものである。

11) これは『旧修辞学』での、修辞学全般に関するロラン・バルトの言葉であるが、実際、モリエの反復法の参照項は二十項目にも上るのである。

12) Cf. Rychner, p.81

13) リシュネルは例えば、『ギョームの歌』の相異なった二人の登場人物であるギシャールとジラールの死を語った部分に、並行詩節とそれに続いて分岐反復を認める。この場合「同一時点から派生した二つの未来」というのはあり得ないのであって、単純にギシャールとジラールの死に際の態度に違いがあったに過ぎず、つまり「クロノロジックな進行」の撹乱はあり得ないのである。こうした「反復法」と「反復」の同一視は、後の研究者に共有されることになった為、リシュネルの「反復」に関する優れた指摘の多くが理解されないままになって来たのである。しかし一方で、こうした同一視こそが「物語」のレヴェルと「詩」のレヴェルの対立による叙事詩技法の検討を可能にしたのであり、その点からこそリシュネルの功績は評価されるべきであろう。リシュネルは詩節間の関係の分類の基準として反復に着目し、その限りにおいて厳密な形式化を施していたのであって、本論とは事実を捉える視点が異なっていたに過ぎない。事実、彼の学問的厳密から来た様々の指摘は、現代の研究者に今一度注目されて然るべきものが多い。例えば、「詩人」「読み手」などの用語を無反省に用いると、リシュネルはシチリアーノを批判しているが、現在でも尚、この用語は余りに無反省に用いられている場合が多いのである。
Cf. Rychner, p.155

14) 本論は、シニフィアン、シニフィエ等の用語を、言語学的な文脈から幾分逸脱して用いている。というのも、上の両項は本来、一つのシーニュ即ち、語に見出されるものだからである。但し、現在、数語、一文、数文を一括して、その中に、両項を見出すのは、少なくとも、「物語論」では、一般的である。そもそも「物語論」は、ロラン・バルトの「ディスクールのレヴェルにおける言語学」を受け継いだものであって、言語学の対象の最大単位が文であるのに対し、物語の最大単位は文章なのである。

15) Cit. Les sources manuscrites du CLG, Robert Godel, SM. 124
但し、引用は、『ソシュールを読む』（丸山圭三郎、岩波セミナー・ブックス、1983、pp.202-203）より。

16) こうした形式上の差異の観点から、ヨーロッパの近現代、古典古代世界と中世のテクストを扱う場合、時間論的な観点からそれぞれの形式を検討してみるのは有益なことと思われる。既に美術史の領域では、エルヴィン・パノフスキーが、空間論的な観点から絵画の形式である遠近法を取り扱っているが、その見解は極めて示唆に富んだものである。

【書　誌】

［洋文献］

Ⅰ．レトリック・詩学関係

Barthes, Roland　*L'Ancienne Rhétorique —Aide-Mémoire—* (*Communication* 16, 1970, *L'Aventure de Sémiologie*, Seuil, 1985)
『便覧　旧修辞学』（沢埼浩平訳、みすず書房、1979）

Barthes, Roland　*Introduction à l'Analyse Structurale des Récits* (*Communication* 8, 1966　*Poétique du Récit* Seuil, 1977)
「物語の構造分析序説」（『物語の構造分析』、花輪光訳、みすず書房、1977）

Cerquiglini, Bernard　*La Parole Médiévale* (Minuit, Paris, 1981)

Faral, Edmond　*Les Arts Poétiques du XII et du XIII Siècle —Recherches et Documents sur la Thechnique Littéraire du Moyen Age—* (Champion, Paris, 1971)

Fontanier, Pierre　*Les Figures du Discours* (Flammarion, Paris, 1977)

Genette, Gérard　《Discours du Récit— Essai de la Méthode—》 (in *Figure III*, Seuil, coll."Poétique", 1972)
『物語のディスクール——方法論の試み——』（花輪光・和泉涼一訳、水声社、「記号学実践叢書」、1985）

Nouveau Discours du Récit (Seuil, coll. "Poétique", 1985)
『物語の詩学——続物語のディスクール——』（和泉涼一・神郡悦子訳、書肆風の薔薇、「記号学実践叢書」、1985）

Morier, Henri　*Dictionnaire de Poétique et de Rhétorique* (PUF, 2e éd. 1975 [1e éd. 1961])

Ⅱ．武勲詩関係

作品：刊本と翻訳

Brault, Gerard　*The Song of Roland* vol.1 —Oxford Text and English Translation —
(The Pennsylvania University Press, London, 1978)

Bédier, Jeseph　*La Chanson de Roland* (Piazza, Paris, 1921)

Duggan, Joseph　*A Concordance of the Chanson de Roland* (Ohio University Press, Ohio, 1969)

Gautier, Léon — *La Chanson de Roland* —Texte Critique, Traduction et Commentaire, Grammaire et Glossaire — (Alfred Mame et Fils, Tours, 1982)

Gégout, Fabienne — *Le Charroi de Nîmes* traduit (Champion, Paris, 1984)

Jenkins, Atkinson — *La Chanson de Roland* —Edition, Notes and Glossary — (Heath's Modern Language Series, Boston, 1924

Lachet, Claude — *La Prise d'Orange* traduite et annotée (Klincksieck, Paris, 1986)

Langlois, Ernest — *Le Couronnement de Louis* édité (Classique français du moyen âge, Champion, Paris, 1984)

Lanly, André — *Le Couronnement de Louis* traduit (Champion, Paris, 1983)

McMillan, Duncan — *Le Charroi de Nîmes* édité (Klincksieck, Paris, 1978)

Moignet, Gérard — *Pour Connaître La Chanson de Roland* — Texte Etabli d'après le Manuscrit d'Oxford, Traduction, Notes et Commentaires— (Bordas, Paris, 1969)

Mortier, Raoul — *Les Textes de la Chanson de Roland* 10 vol. (La Geste Francor, Paris, 1940-44)

Perrier, J.-L. — *Le Charroi de Nîmes* édité (Classique français du moyen âge, Champion, Paris, 1968)

Régnier, Claude — *La Prise d'Orange* éditée (Klincksieck, Paris, 1983)

Segre, Cesare — *La Chanson de Roland* — Introduction, Texte critique, Variantes de O, Index des Noms Propres— (Ricciardi, Milano-Napoli, 1971, [Traduite par Madeleine Tyssens, Droz, Genève, 1989])

武勲詩関聯研究書

Aebischer, Paul — *Préhistoire et Protohistoire de Roland d'Oxford* (Romanica, Berne, 1972)

Ashby-Beach, Genette — *The Song of Roland — A Generative Study of the Formulaic Language in the Single Combat* (Rodopi, Amsterdam, 1985)

Bédier, Joseph — *La Chanson de Roland Commentée* (Piazza, Paris, 1927 / 1968[nouveau tirage])

Brault, Gerard J. — *The Song of Roland* vol 2 — Introduction et Commentary — (The Pennsylvania University Press, London, 1978)

Bulatkin, Elenor W. — *Structural Arithmetic Metaphor in the Oxford Roland* (Ohio State University Press, Ohio, 1972)

Cook, Robert Francis — *The Sense of the Song of Roland* (Cornell University Press, Ithaka-London, 1987)

Le Gentil, Pierre — *La Chanson de Roland* (Hatier [Connaîssance des Lettres], Paris, 1967)

Hecht, Michael — *La Chanson de Turold — Essai de déchiffrement de La Chanson de Roland —* (J.C. Bally, Paris, 1988)

Pei, Mario A. — *French Precursors of the Chanson de Roland* (1948, Columbia University Press, New York, 1948 [reprint: AMS Press, New York, 1966])

Pensom, Roger — *Literary Technique in the Chanson de Roland* (Droz, Genève, 1982)

Segre, Cesare — *La Chanson de Roland* tome II — Apparat de la rédaction β et Recherches sur l'Archétype— (Ricciardi, Milano-Napoli, 1971, [Traduite par Madeleine Tyssens, Droz, Genève, 1989])

Faral, Edmond — *Les Jongleurs en France au Moyen Age* (Paris, 1964, [Réimpression: Slatkine, Genève, 1987)

Lafont, Robert — *La Geste de Roland* 2 vol. (L'Harmattan, Paris, 1991)

Rychner, Jean — *La Chanson de Geste — Essai sur l'Art Epique des Jongleurs* (Droz-Giard, Genève-Lille, 1955)

Menéndez-Pidal, Ramón — *La Chanson de Roland y el Neotradicionalismo* (1959, Traduite par I.-M. Cluzel, *La Chanson de Roland et la Tradition Epique des Francs* [A.-J. Picard et Cie, Paris, 1960 <2e édition>])

De Riquer, Martín — *Los Cantares de Gesta Franceses* (Madrid, 1952, Traduiction par d'I.M. Cluzel, *Les Chansons de Geste Françaises* (Nizet, Paris, 1957 [2e édition])

Ⅲ. 歴史性について

Zumthor, Paul　*Parler du Moyen Age* (Minuit, Paris, 1980)

Foucault, Michel　*L'Archéologie du Savoir* (Gallimard, "Nrf", 1969)　『知の考古学』（中村雄二郎訳、　河出書房新社、現代思想選10、1981）

［和文献及び翻訳文献］

Aristote　『詩学』（村治能就訳、『世界の大思想２』、「アリストテレス」、1966）

『弁論術』（戸塚七郎訳、岩波文庫、1992）

Curtius, Ernest Robert　『ヨーロッパ文学とラテン中世』（南大路振一、岸本通夫、中村善也訳、みすず書房、1971）

Le Goff, Jacques　「教会の時間と商人の時間」（新倉俊一訳、『思想』、1979）

Panovsky, Erwin　「芸術家・科学者・天才」（木田元訳、『現代思想』、「特集ルネッサンスの光と闇」）

Steblin-Kamenskii　『サガのこころ――中世北欧の世界へ』（菅原邦城訳、平凡社、1990）

佐藤康邦　『絵画空間の哲学――歴史の中の遠近法』（三元社、1992）

竹岡敬温　『「アナール学派」と社会史』（同文館、1990）

松原秀一　「文学語とレトリック」（『フランス文学講座６　批評』所収、大修館書店、1980）

［執筆者の他の論文］

「武勲詩の起源問題に関する諸主張」（ *TLLMF*　1、大阪市立大学森本研究室発行、1990年、pp.22-27）

「武勲詩の起源問題に関する諸主張――その２：Paul AebischerとMenéndez Pidalを巡って――」（ *TLLMF*　2、大阪市立大学森本研究室発行、1991年、pp.7-12）

「『ロランの歌』と「一貫性」の神話」（ *LUTECE*　21　大阪市立大学フランス文学会、1991年、pp.23-38）

「武勲詩に関する諸研究――その１：Jean Rychner：『武勲詩』」（ *TLLMF*　3、大阪市立大学フランス文学会、1992年 6月発行）